

伝統満族集落における街路構成と宅地割の関係
- 中国・新賓満族自治県勝利村の事例研究その2-

満族 集落空間 街路構成
宅地割

正会員 ○楊 丹*
正会員 牛島 朗**
正会員 中園 真人***

1. はじめに

前編では勝利村街路構成パターン、宅地形状の特徴、道路条件と宅地門及び主屋入口の関係、家屋配置パターンを明らかにした。本論では 2017 年 10 月に勝利村で調査した民家の中に家屋配置Ⅱ、ⅢとⅣ型に属する事例の敷地の特徴等を明らかにすることを目的としている。

2. 調査事例分析

前編の第 5 章の家屋配置パターンの分類に基づき、2017 年 10 月に調査した 14 例はそれぞれ第Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ型及びその他に属することが分かる。

2.1 家屋配置Ⅱ型事例

① 事例 No. 28 (敷地面積:212.7 m²、主屋面積:71.4 m²)

No. 28(図 1)は一世代家族(M73F71)により利用されている。敷地の間口(W)は 13.9m、奥行(D)は 15.3m、D/W は 1.1、敷地の形はほぼ正方形と見える。敷地の南側と西側はそれぞれ幅員 4mのコンクリート道路と 2.5mの土道路に接しているが、門が南側に設けられるため、モデル SW-S に属し、1軒の主屋と1軒の副屋により構成される家屋配置Ⅱ型である。

敷地の一番奥にある3間の主屋は1991年に完成した建物であり、間口が12.1m、奥行が5.9mである。庭は土仕上げで、副屋といえは東側にある1個大きい木造の玉蜀黍(トウモロコシ)小屋しかない。2015年から村内に流行している室外竈と簡単な浴設備が敷地の西側に設置されている。西南隅に鶏小屋があり、主屋の手前があるモルタル仕上げのベランダの上には井戸が設けている。

事例 No. 28 では、主屋も敷地も面積が広くないが、玉蜀黍小屋と鶏小屋等の施設が揃えている。家屋配置Ⅱ型の民家の中に、No. 28 のような小規模の民家事例は少なくない。

② 事例 No. 39(敷地面積:306.7 m² 主屋面積:78.9 m²)

No. 39(図 2)は2世代の家族(M48F46、M20F20)が利用している。敷地の間口(W)は 16.4m、奥行(D)は 18.7m、D/W は 1.1、形は正方形に近似する。南側に設ける門は幅員 2.5mの土道に接するため、数が最も多いモデル S-S に属し、1軒の主屋と1軒の副屋により構成される家屋配置Ⅱ型である。

主屋は敷地の北縁から 3.3mと離れている 2007年に完成した間口 11.6m、奥行 6.8mの3間建物である。副屋として西側に1個大きい木造の玉蜀黍小屋がある。庭の東南隅に柴が積み上げられている。主屋の西側に煉瓦造

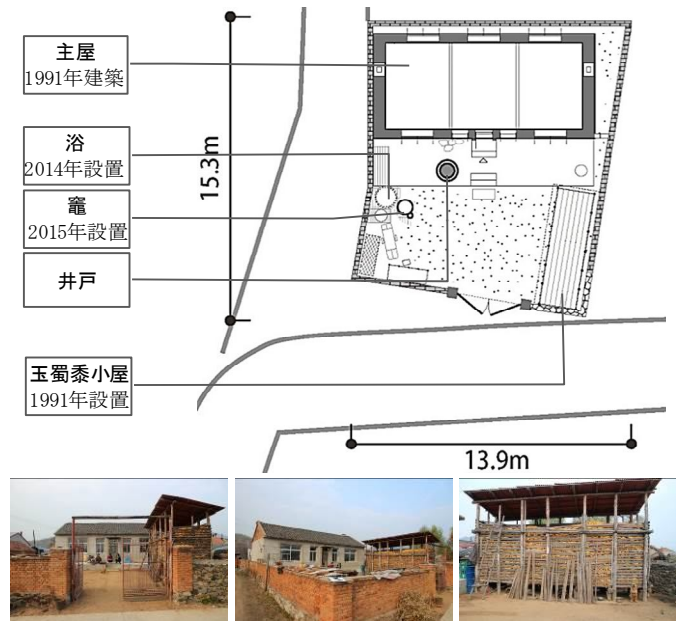


図1 事例 No. 28 平面図と外観写真

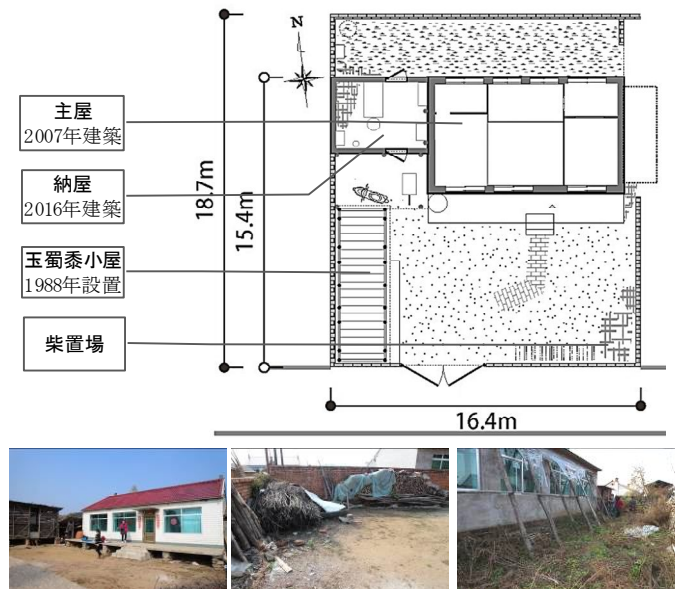


図2 事例 No. 39 平面図と外観写真

倉庫がある。庭の仕上げは殆ど土で、敷地正門と主屋の入口の間の通路がレンガで敷かれている。主屋の裏の空き地は狭くて耕作できないため草ぼうぼうとなっている。

No. 39 と No. 28 の前庭の奥行は殆ど同じで(約 15m)、間口の幅について No. 28 より No. 39 の方が 2.5m広い

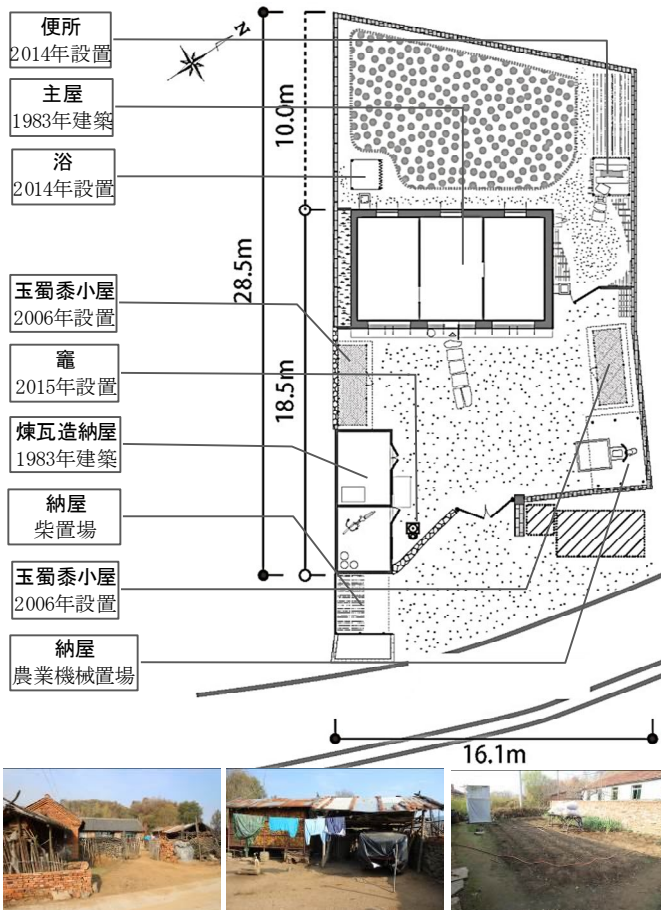


図3 事例 No. 10 平面図と外観写真

主屋の横側に倉庫が設置できる。

2.2 家屋配置Ⅲ型事例

① 事例 No. 10 (敷地面積:378.4 m² 主屋面積:75.2 m²)

No. 10(図 3)は 1 世代家族(M68F66)が利用している。敷地の間口(W)は 16.1m、奥行(D)は 28.5m、D/W は 1.8、形は縦向きの長方形となる。敷地の南側に設ける門は幅員 3.3mの土道に接してモデル S-S に属し、1 軒の主屋と 2 軒の副屋により構成される家屋配置Ⅲ型である。

主屋は 1983 年に完成した間口 11.4m、奥行 6.6m の 3 間建物である。土仕上げの前庭の西側に 1 個金属造玉蜀黍小屋と 2 間の煉瓦造物置の納屋が設置され、東側に 1 個金属造玉蜀黍小屋と農業機械置き場の納屋があり、敷地と道の間に柴置き用の納屋がある。主屋の後ろで西・東側に簡易な浴設備と便所がそれぞれ設置されている。裏庭の畑でネギ等野菜を作っている。

家屋配置Ⅲ型の民家の中で、事例 No. 10 は典型的な小規模事例で、Ⅱ型の No. 28 及び No. 39 と比べ、前庭の奥行が 3m長いいため、副屋の数も種類も多い。裏庭が広いため(奥行 10m)、耕作できる。

事例 No. 48 (敷地面積:1000.8 m² 主屋面積:112.7 m²)

No. 48(図 4)は 2 世代家族(M66F66、M48、M39m16)が利用している。敷地の間口(W)は 27.8m、奥行(D)は 36.0m、D/W は 1.3、形も正方形に近似する。敷地の東側に設ける

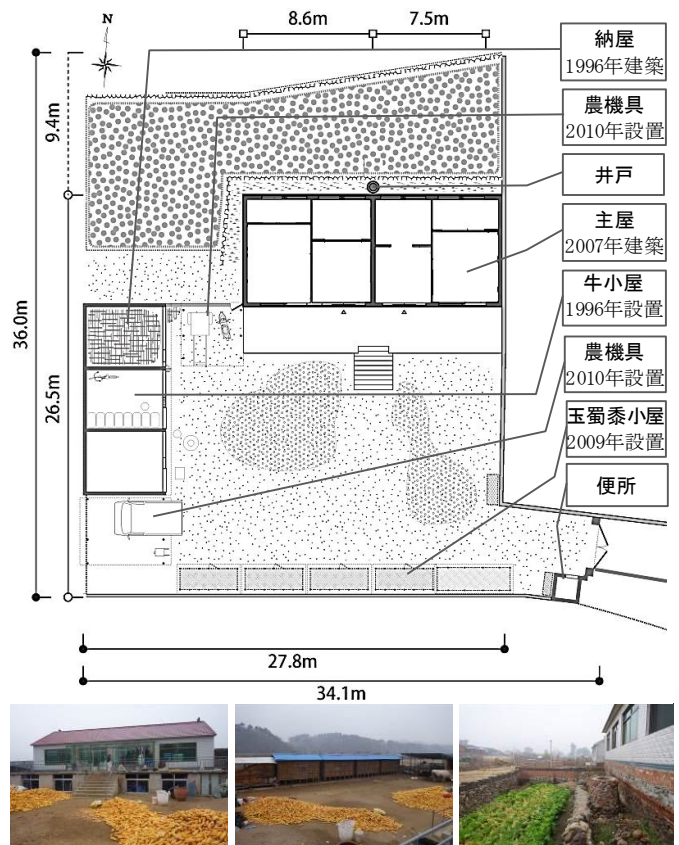


図4 事例 No. 48 平面図と外観写真

門は幅員 4mの土道に接し、モデル E-E・S だと判断される。家屋配置パターンについて、事例 No. 10 と同様な 1 軒の主屋と 2 軒の副屋により構成される家屋配置Ⅲ型である。

主屋は 2007 年に建替えた間口 16.1m、奥行 7.0m の 4 間建物である。土仕上げの前庭は農作業のための空間で、西側に物置用の煉瓦造納屋 1 軒、牛小屋 1 軒、農用器具置き場 1 軒ずつがある。南側に 5 個の金属造玉蜀黍小屋と 1 カ所の便所が設けている。主屋の西側に農機具置き場と裏庭につながる納屋が築かれている。主屋裏の敷地で白菜等の野菜を植えている。井戸は主屋裏面の真ん中に設置されている。

No. 48 の規模は大きい、主屋の面積が広く副屋の数が多い、牛などの家畜を飼っている。秋に収穫した玉蜀黍を広い前庭で乾かす。入り口は敷地の東側に設置し、一方、副屋は主に西側と南側に分布されているため、敷地の形は縦向きの長方形ではなくより正方形に近づく。

② 事例 No. 15 (敷地面積:1307.8 m² 主屋面積:110.9 m²)

No. 15(図 5)は 2 世代家族(M63F63、M38F36f12)が利用している。敷地の間口(W)は 30.7m、奥行(D)は 42.6m、D/W は 1.4、形は縦向きの長方形に近似する。敷地は道から離れるため、南側に設ける門から幅員 4mのコンクリートの道につながる長さ 17mの通路が敷かれてある。モデル S-S の事例として 1 軒の主屋と 2 軒の副屋により構成される家屋配置Ⅲ型である。

主屋は 2015 年に建替えた間口 16.8m、奥行 6.6m の 4

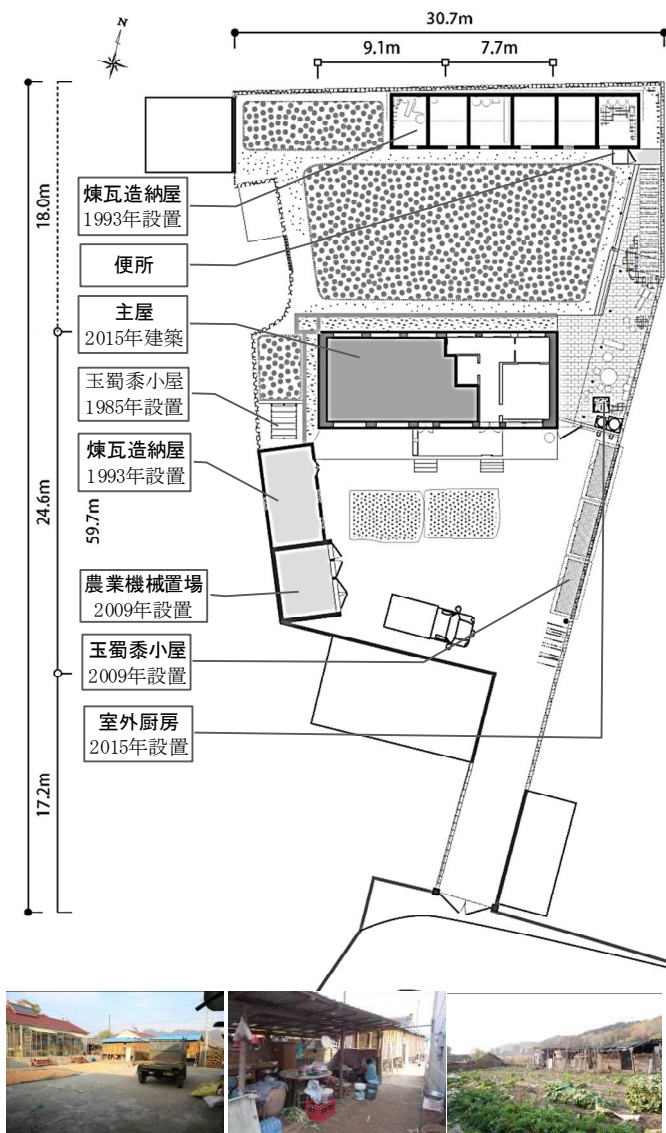


図5 事例 No. 15 平面図と外観写真

間建物である。前庭にある副屋と言え、西側に1個木造の玉蜀黍小屋、1軒の煉瓦造納屋、1軒農業機械置き場が並んであり、東側に3個金属造玉蜀黍小屋が設置される。コンクリート仕上げの庭は広く清潔であるため、よくそこで野菜等を日干しする。主屋の東側に室外竈、テーブル等厨房用具が設けられ、夏用の台所兼裏庭への通路とする空間となる。裏庭の畑の面積が大きい、白菜や葱等の野菜を植える以外に、豚を飼う用の小屋も設置されている。

No.15はNo.48と同じ大規模の事例として、前庭と主屋の面積はほぼ同じであるが、敷地の形が異なる。No.15の敷地入り口は南側に設けられ、副屋は庭の西側と東側に設置されていることが主な誘因だと考えられる。

2.3 家屋配置Ⅳ型事例

① 事例 No. 14(敷地面積:441.7㎡ 主屋面積:61.1㎡)

No. 14(図6)は1世代家族(M68F70)が利用している。敷地の間口(W)は10.8m、奥行(D)は40.9m、D/Wは3.8、

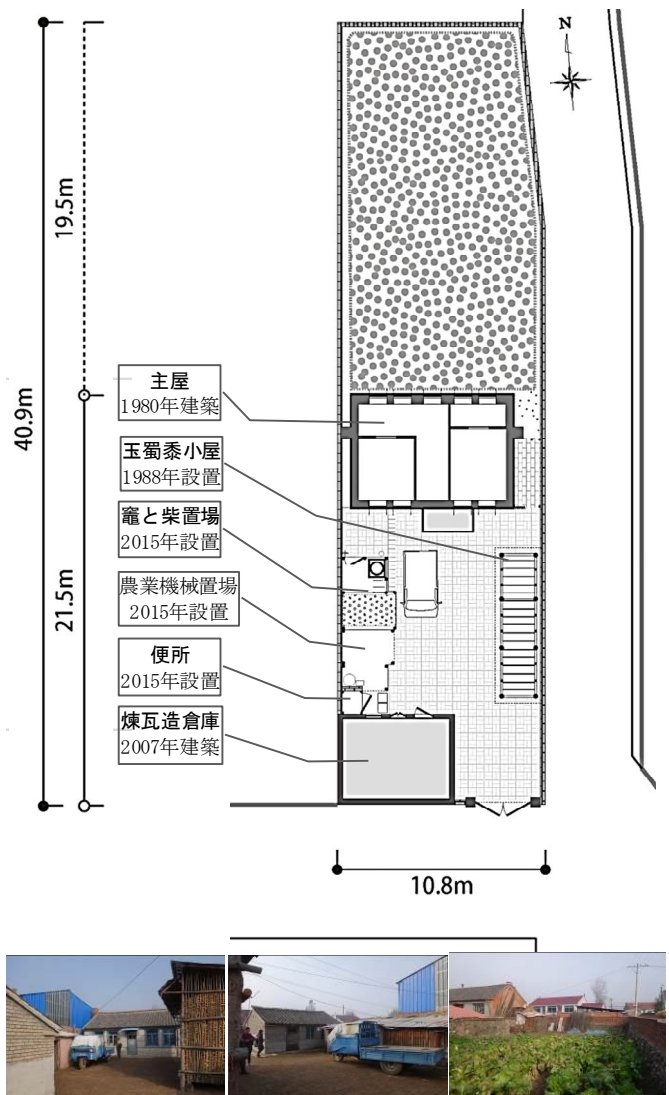


図6 事例 No. 14 平面図と外観写真

形は縦向きの細長い長方形である。敷地の形も面積も典型的な道Ⅰに沿っている家屋である。敷地が東西方向の幅員7mのコンクリート道と南北方向の幅員3.4mの土道が交差する場所にあり、正門は庭の南側に設けられ、モデルSE-Sに属し、1軒の主屋と3軒の副屋により構成される家屋配置Ⅳ型である。

主屋は1980年に完成した間口9.4m、奥行6.5mの3間建物である。前庭はレンガ仕上げであり、西側に夏用竈付きの柴置き用の納屋1軒、農業用機械の置き場1軒、便所1軒がある。南側に1軒の煉瓦造の低い倉庫が建築されている。東側に1個広い木造の玉蜀黍小屋が設けられている。西側の副屋に沿って排水溝が設置されているため洗濯排水が庭を汚されない。半分の敷地面積を占める前庭が日常生活には十分であるため、主屋の位置は敷地の一番奥ではなく真ん中に築かれている。裏庭は白菜を植える畑であり、畑につながる細い通路は主屋の東側で設けている。

No. 14は建築年代と所在場所の影響により敷地の面積が広くない。家畜を飼う副屋がなく玉蜀黍小屋、倉庫、便

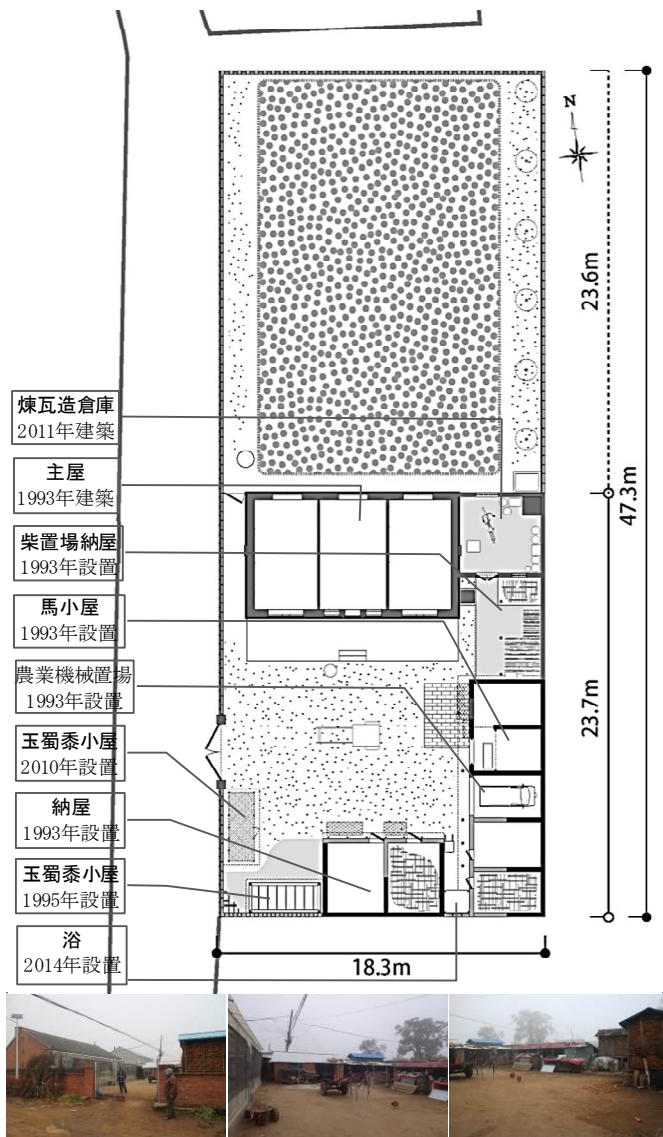


図7 事例 No. 31 平面図と外観写真

所という副屋が有するが、畑の面積が小さいため、家屋配置IV型の中の小規模事例である。

② 事例 No. 31(敷地面積:865.6 m² 主屋面積:95.3 m²)

No. 31(図7)は2世代家族(M68F61、M40F38f14)が利用している。敷地の間口(W)は18.3m、奥行(D)は47.3m、D/Wは2.6、形は縦向きの細長い長方形となる。敷地の西側に設ける正門は幅員5mの道に接するモデルW・W・Sに属し、1軒の主屋と3軒の副屋により構成される家屋配置IV型である。

主屋は1993年に完成した間口12.7m、奥行7.5mの3間建物であり、主屋の所在地は事例No.14と同じ敷地の真ん中にある。前庭は土仕上げであり、西側に1個金属

造玉蜀黍小屋、南側に1個木造玉蜀黍小屋、簡易な浴設備が設置され、以前豚小屋であった現在物置とする納屋が南側と東側にそれぞれ2軒がある。東に農業機械置き場、馬小屋、柴置場納屋と便所付けの煉瓦造倉庫がある。主屋の西側に裏庭へ通路があり、広い裏側の畑で白菜等野菜が栽培されている。

家屋配置II型の2つ事例と同じくNo.31はNo.14の前庭の間口より広い部分は倉庫として設けられている。しかし、門の方位により副屋配置が違う。No.14の門は南側に設け、多数の副屋が西側・東側に設置されていると異なり、No.31の門は西に設け、多数の副屋が南側・東側に設置されている。この事例は大規模民家の中に典型的な西に接道する民家である。

3. まとめ

本論文では、今回調査した14軒民家の中で家屋配置はII、III、IV型に属する7例の宅地形状、面積、接道と配置特徴を着目し、得られた知見は以下の通りである。

- 1) 敷地はより狭ければ、副屋種類が単一的であり、多く事例には玉蜀黍小屋と納屋しかない。逆に、敷地が広ければ、副屋として玉蜀黍小屋と納屋だけではなく農業機械置き場、牛や豚などの家畜を飼う小屋も揃え、特に裏庭の菜園の面積がより大きい。
- 2) 主屋と副屋に囲まれる前庭の面積について、大きな差が見えなく、敷地内で畑の有無は敷地の形状にの影響が大きい。畑があれば、敷地の形状が縦向き長方形で、面積も大きい。逆に、畑が無ければ、敷地の形状がほぼ正方形または横向きの長方形に近い、面積もより小さい。
- 3) 敷地の形状は門の所在場所の影響にも受ける。No.48のように東側又は西側に門を設ける民家は南側に多くの副屋が設置され、前庭の形は横向きの長方形の場合が多い。敷地の形が縦向きの細長い可能性は殆どない。

注

- 1)No.28は1960年に建築した時一間半の瓦葺主屋と一間わら葺小屋であった。
- 2)No.39の建築年代は不明で、もともとは2間の瓦葺の主屋しかなかった。
- 3)No.10は1970年代に建築した時2間の瓦葺主屋と西側に豚小屋があった。
- 4)No.48の建築年代が不明で、1995年に購入された時に3間の瓦葺主屋と庭の西に一つ木造玉蜀黍小屋があった。
- 5)No.15はもともと1980年に菜園で5間主屋を建築した。
- 6)No.14はもともと1980年に建築された。
- 7)No.31は1993年に畑で建築された。

* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程 建築学修士

** 山口大学大学院創成科学研究科 助教

*** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

* Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

** Assistants Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan

*** Professor, Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan